

中日関係史への

回顧と展望

趙 軍

研究の対象から見ても、研究の過程から見ても、中国近代史研究者の私は、日本との因縁が深いのだと言えよう。

大学時代、私の専攻は、「歴史」であった。大学を卒業してから、母校である鄭州大学歴史系（日本の史学科にあたる）で、三年間の助手生活を送った。その時の専攻は、「中国近代史」であった。一九七九年九月、華中師範学院歴史系辛亥革命史研究室の研究生（即ち大学院生）となると、専攻はさらに「辛亥革命史」に集中していった。

辛亥革命史と言えば、中国近代史の範囲で、日本との関係が深かった時期の歴史とも言えよう。日本は、孫文・黄興らが革命活動を行っていた重要な場所、同盟会をはじめ数多くの中国ブルジョア革命派の組織も日本で成立したものである。それゆえ、辛亥革命

に関する文献や資料をひもとくと、日本政府あるいは「日本浪人」について述べた記録は至るところにある。この点から見れば、辛亥革命期における中日関係史の研究は、辛亥革命の全体像を把握する上で重要な意義を持っている。しかし、「文化大革命」以前、中国歴史学界の研究者の中で、近代中日関係史について研究した者はあったが、ほかの研究分野に比べれば、研究者の数も、研究の成果も少なかったのである。七十年代になると、中日関係史の成果もだんだん多くなったが、辛亥革命史研究の全体から見ればやはり非常に不十分な研究分野の一つである。これこそ、私の辛亥革命時期における中日関係史について研究しようとする出発点になったのである。いままでに発表した私の研究は、次の通りである。

A 「宮崎滔天と『支那革命主義』」についての試論（『紀念辛亥革命七十周年學術討論會論文集』中冊（中華書局、一九八三年）所収）。
B 「宮崎滔天と『大陸浪人』」（『紀念辛亥革命七十周年青年史學工作者學術討論會』発表）。
C 「宮崎滔天と興中会」（『華中師範學報』（哲学社会科学版）一九八二年第五期所収）。
私の興味もつばら宮崎滔天に集まったの

はなぜなのか？ 実は辛亥革命時期に中国ブルジョア革命派とつながりがあった日本人の中で、宮崎滔天は最も人々の注目を引く人だった。彼はかつて中国革命党人の社会に対する影響を広めるために、情熱をもって、『三十三年の夢』をはじめ数多くの文章を書いた。又「中国同盟会」の大同団結のことに力を尽くした。彼も孫文と一緒にいくつかの武装蜂起の計画に参画して、武器調達などを演じた。これによって、孫文は「宮崎寅藏君は、今の俠客なり。識見高遠にして、抱負凡ならず。……吾人の支那を再造するの謀、共和を創興するの挙あるを聞き、千里を遠しとせず、相い來りて交りを訂び、期許、甚だ深く、助励、極めて摯なり、之を虬髯（公）に方るも、誠に之に過ぐるものあり」と宮崎滔天を褒めたのである。

孫文らの革命事業を助けようとした宮崎滔天の行動に惹かれて、私の宮崎滔天研究が始まった。辛亥革命当時、中国革命派と関係のあった「大陸浪人」は多かつたけれども、本心から中国革命を援助した人は、ただ宮崎滔天とごく一部の人にしかすぎない。ほかの大陸浪人は下心のあった人ということが今では大体明らかになっている。このような大陸浪

人の行動を否定すると共に、宮崎滔天のよう
な中国革命党人の忠実な友達に対しては、大
いに賞讃すべきことと思うし、宮崎滔天の行
動を究明するのは、学問の面から見ても有益
な仕事だと思っている。しかし、この研究は
外国人の私にとっては本当に難しい作業であ
る。最初の難点は、資料が手に入りにくいと
いうことである。中国語版の資料のほか、日
本側の資料は当時ほとんどなかった。幸い
に、その時、私の指導教師である章開沅先生
は、井上清先生を代表とする京都日中学術交
流懇談会の招請により、一九七九年十一月七
日から同二十二日にかけて日本を訪問した。

章先生は小野川秀美・島田虔次・小野和子・
狭間直樹先生などの日本の学者と辛亥革命史
および中日関係史の研究について話しあい、
友好的な関係を結んで、日本の学者からの贈
呈書や自分で購入した書籍などをたくさんた
ずさえ帰国された。これらの資料は私の研究
の基本的資料になった。

章先生が持ち帰った資料の中で、いちばん
重要なものは、『宮崎滔天全集』と『革命評
論』である。『宮崎滔天全集』（小野川秀美・
宮崎竜介編、平凡社）は小野川先生が平凡社
の岸本武士氏に頼んで章先生に贈られた記念

品である。小野川先生が一九八〇年夏に逝去
されたため、章先生は小野川先生に会見した
最後の中国人学者となり、この本も非常に貴
重なものになったのである。『革命評論』（宮
崎滔天編輯、半月刊）は日中友好協会（正
統）奈良県本部名誉会長北山康夫先生が中南
地区辛亥革命研究会へ贈呈されたもので、
ともに近代と現代にとまたがる中日両国人民
の友誼の象徴だと言えよう。

一九八〇年秋、宮崎滔天の孫息女である宮
崎蓀冬女史を始めとする滔天会訪中団は華中
師範学院を訪問して、孫文と宮崎滔天らに関
するいろいろな写真や資料を私たちの研究室
に贈られた。そのあと、宮崎蓀冬女史は又東
京から『犬養木堂伝』を郵便で送ってこれら
た。これらの資料も私の研究に大いに役立っ
たのは勿論である。宮崎滔天に対する研究を
進めているうちに、もう一つの難関が現われ
てきた。それはまず宮崎滔天と他の大陸浪人
との関係、日本政府との関係ということであ
る。さらには、大陸浪人を養成した明治・大
正時代の日本社会の実態はどうなのかという
問題である。これらの問題を解決しなければ、
一歩進んだ研究をすることは不可能なの
である。

ちょうどその時、吉田富夫・狭間直樹・清
水稔先生たちの努力によって、華中師範学院
と佛敎大学の間に、私と清水稔先生の交換研
修について、平等互恵的な協定が結ばれた。
これは清水先生の研究に対しても、私の研究
に対しても、非常に有益なことである。日本
に着いてから、もう九カ月がたった。水谷幸
正学長や佐藤長史学科主任（当時）、米田賢次
郎先生を初めとする佛敎大学の方がたの御厚
意によって、私の研究はすでに沢山の収獲を
得た。

かつて孫文と宮崎滔天のつきあいは、中日
関係史の上に貴重な友好の記録をのこした。
いまの中日関係史はその歴史の継続であり、
中日両国の学術交流と学者交流は、さらにこ
の歴史に新しい頁を加えていくことである
う。中国人の一人として、私は中日両国の関
係は将来にいたっても友好の歴史になること
を心から祈っている。同時にこれは日本の友
人たちの希望だとも思っている。

本文の著述と日本語翻訳にあたり、藤田純
子先生のご協力をいただいた。記して謝意を
あらわしたい。

（中華人民共和国華中師範学院教師・

佛敎大学研究員）